

# 民衆の宗教

菅原伸郎

南無  
善財

前回の本欄で「宗教的覚醒と恍惚とはどう違うか」などと書いたところ、カルト被害者を支援している知り合いの弁護士から「議論をさらに深めませんか」というお誘いがあった。秋の夕暮れ、東京・新宿に集

まったのは、ほかに社会部記者、修験道研究者、日蓮宗僧侶、女性宗教学者も加え、それぞれにカルト問題にかかわる六人だった。

私の問題提起は「伝統宗教にせよカルトにせよ、信じるからこそ危うくなる。大切なのは、信じることより気づくこと。宗教的感動が大事なのだが、それもエクスタシーではな

く、覚醒でなければならぬ」という趣旨だった。話し合いは冒頭から「民衆の宗教」をめぐるこんな論争になった。

「悩みや苦しみを抱えた民衆は何かを信じたのだ。現世利益はもちろん、熱狂や忘我を求めもする。その願いを無視した宗教論は、ないものねだりの空理空論だ」

「しかし、俗信を認めれば、バラモン教の世界に逆戻りする。そうした迷える衆生のためにこそ、ゴータマはブツダになったのに」

「覚醒の宗教など、エリートにしか理解されない。民衆から遊離しているから、日本の臨済禅やプロテストントは広まらないのだ」

「呪術宗教は民衆の望みにかなうかもしれないが、オウム真理教などの土壌にもなつてきた。鎌倉仏教の祖師たちは修験道や密教を否定する形で登場している」

「祈祷や習俗を拒否し、民衆の願いを認めない浄土真宗などは、まさに原理主義とっていい」

「民衆、民衆というけれど、それは根底に愚民観があるからではないか。そもそも、あなた自身は迷いを受けられるのか」……。

論客ぞろいだけに、少々のビールで議論はたちまち沸騰する。しばし

反省して第二ラウンドに移ったが、私が「超越的存在に対して、ひれ伏したり、畏れたりするのはカルトに近い信仰だ。法華経に『施無畏』という言葉があるように、仏教の本来は『畏れるな』にある」と発言し、またまた紛糾していった。

「違うなあ。大自然の中で超越的な力を感じて『畏敬の念』を抱くことは美しい感性じゃないか」

「いや、本当の神仏は『畏れ』の対象というより、包み込むような、もっと温かい存在だ。『敬虔の念』というならまだ分かるが」

「修行で山に入り、かなたから昇ってくる朝日や湧き上がる朝霧を見たときの感動、そして思わず手を合わせる自分は大事にしたいね」

「たしかに山登りは気持ちいいし、感動もする。でも、太陽、月、自然現象を超越的存在に結びつけることはない。宗教はむしろ、独り生まれ、独り死んでいく人間存在を見つめるところから始まる」

「仏教は空や無が本質というけれど、民衆は阿弥陀仏や大日如来という有形の対象を拜んでいる。日本仏教はそれらを大自然の中で受容しつつ広まってきた」

「阿弥陀仏は方便であり、この思想

があるから仏教はおもしろい。超越者を実体として考えるキリスト教などと違い、あくまでも方便として礼拝する。仮のものだから、偶像崇拜に走らず、相対的に向き合える」

「そうかな。多くの寺院は仏や如来を実体のように拜ませている。お盆には精霊が帰ってくるかのごとく説いてもいる。ホンネとタテマエが違いうすぎるよ」

「う、うーん。それもそうか。そういえば、伝統宗教にも怪しい要素はいっぱいあるね」……。

といった具合で、まるで学生同士のような激論三時間。もちろん、結論はないまま、散会となった。

(すがわら・のおお)

東京医療保健大学教授)

